落葉の上を

永井龍男

朝日新聞社

落葉の上を

定　価　一六〇〇円

一九八七年七月二十五日第一刷発行

著　者　永井龍男

発行者　八尋舜右

印刷所　図書印刷株式会社

発行所　朝日新聞社
〒104 東京都中央区築地五―三―二
電話　〇三―五四五―〇一三一（代表）
編集・図書編集室　販売・出版販売部
振替　東京〇―一七三〇

©Tatsuo Nagai 1987年
ISBN4-02-255654-4

Printed in Japan

落葉の上を　目次

I

「秋口」 9
夕空 13
谷戸の町 18
小橋 21
赤飯 24
喫煙 27
評判 30
閑日 34
北風 38
印刷物 42
悲しい顔 46
歳末追憶 50

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

大年 54
松の内 58
去年今年 62
日向ぼっこ 66
遠山 70
豆をまく 74
階段 78
横顔 81
鳥影 85
竹 89
星うらない 93
お茶の水 97
座 101
春の星 105

II

小川のほとり　111
残花余花　115
春日遅々　119
昔の独身者　121
格下げ賛成　123
九段の嘆き　125
虫のいろいろ　127
小作家の分際　129
象形文字　131
矢車の音　133
老人の注文　135
少年と汽車　137

料亭と茶屋と　141
間に合わぬこと　147
冬の汽笛　152
その日その日　158

III

余技雑記　167
東北新幹線　171
百日紅　今日出海追悼　175
晩年の直木三十五　180
大佛さんとの縁　195
芥川賞・直木賞余談　216
あとがき　235

装幀　多田　進

I

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

「秋　口」

八月三十一日。

八月には、もう一日余分があったのかと思った。暑い、永い夏であった。その上、世界にも日本にも、狭い私の身辺にすら、意外な事の多い夏であった。

なんとか、この秋口を乗切れますようにと、二人暮しの家人の分もふくめて、どこか遠いところに向けて祈っていた。祈るなんていうものではあるまい。とにかくちょっとの間、心身をやすませて下さいという心持である。

以下、八月中のメモから引用する。

八月十五日、正午直前の天気予報は、蔵王の裾野に芒の穂がなびくと、言葉短かに告げた。戦後四十年目の終戦記念日ということで、この日を中心に新聞テレビでさまざまな回顧がなされたが、予報官のさりげない冒頭の一言が、もっとも素直に胸に染みた。私自身が、穂芒の一本と化して、透明な光りの中にそよいでいるような感覚があった。

自らの老いをかいま見たような気持でもあった。

鎌倉界隈は午前中一時曇り、日の光りがふたたびすだれ越しに、真夏の庭を透かし出すと、暑気は一気に上ってきた。家人とオートミールをすすってから、病院行きの支度をした。月に二度鎌倉うちの病院で健康診断をしてもらう日に当っていた。カンカン照りの表通りに出て、帰り車のタクシーを拾った。いつもなら海岸へ出かける車で混雑する町が、今日は一とけた外したような閑けさであった。

目下私の方から、担当医師に質問するような故障はなく、診察は簡単にすんで薬をもらい、自動ドアのするすると開くまま私は病院を後にした。もっともその間、「どうだ、今日は八月十五日だ。歩いて帰らないか」「よかろう、歩こうとも」と自問自答していた。

「なるほど酷暑という奴は、焦げた舗道が熱気をもろに吹上げるのだな」

まったく、そういう暑さであった。十九歳の折りの関東大震災と、四十代で遭遇した終戦前後の記憶が、入りまじって浮んでは消えた。共に東京での経験であったが、別に、区別をしようとも思わぬ。

家まで私の足で四十分ほどの道程であった。

帰宅怱々、流れる汗をおさめつつ北縁に立つと、秋海棠の花を見つけた。この花の紅は、やさしい花柄と共に、いかにも人なつこい。

八月二十三日、この日を「処暑」という由。立秋より十五日、暑気止むの意だそうだが、なかなかそんな生易しい様子ではない。

家人と日々問答の間、この頃カンシャクの度数がしきりと上昇するのは、自らの行止りが間近かな証左である。

カンシャクの後しばらくは、孤独である。

眠れない夜が、いつから続いているか。

翌朝の寝不足を思うと、睡眠薬を服(の)まずには床に入り難くなった。知合いの医師二人までが、最近の眠剤は害が少くないから心配無用と云うが、そうは体が納得しない。

しかし服用しないと、一睡もできない。

服まぬときめた夜は、左を下にした顔部の脇まで右手を伸ばし、そこのシーツに指先きで習字をする。毛筆を持った時いくらか役に立つだろう。それに疲れれば、うろ覚えの詰将棋を何回となく闇の中でくり返す。自室に鍵(かぎ)を下し、誰も入れまいとする行為に似ているかも知れない。そうかといって、ある思考に踏み入ると、夜明けまで眠れないことになる。四時には瓶を揺らして牛乳屋の自転車が、四時半には新聞配達の単車が通る。五時、ラジオにスイッチを入れ、一晩自力で過したかとホッと安心のようなものを

感じる。

まあそんな色褪せた日々を右から左から、一老人の眼で受けとめたスナップを、しばらく続けてみることにした。

夕　空

詩人三好達治が三十九歳の時書いた、「秋夜雑感」という感想の中に、以下の詩は収められている。申訳ないことに、出だしの数行は紙面の関係で略したが、眼を通していただきたい。

今は秋　その秋の
はやく半ばを
過ぎたるかな
耳かたむけよ
耳かたむけよ
近づくものの声はあり
窓に帳帷(とばり)は

とざすとも
訪なふ客の
声はあり
落葉の上を歩みくる
冬の跫音(あしおと)

薪(たきぎ)をはこべ
ああ汝
汝の薪をはこべ

今は秋、その秋の
一日去り
また一日去る林にいたり
かしこくも
汝の薪をとりいれよ
ああ汝、
汝の薪をとりいれよ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c